

園からの便り
ひぐらし9
2023/SEP
こども園せいび

営みは境を越えて

その日は、珍しくのんびりとした帰路であった。たいていの旅は、あれこれと立ち寄る場所を詰め込んでしまうか、渋滞を避けたくて、また今度寄ればいいと決め込んで、ただただ家路を急いでしまう。そして、その前を通るたびに少し心惹かれながらも、「また今度」を幾度も重ねてしまうものだ。

さっそく「前からのこの建物、気になってるんだよね。」と、立ち寄ったコンビニの向かいに建つ、なかなか凝った造りの白亜の殿堂を指差す友人。その駐車場を示す「伊豆の長八美術館」と書かれた道沿いの案内板を読んでも、伊豆の名産品を想像するくらいで、何が展示されているのかさっぱり見当がつかない。

彼の「また今度」という言葉を聞く前に、「じゃあ行ってみよう」と間髪を入れずに声を上げたのがもう一人の友人。自分だけなら選ばない道を歩むこともある。これが仲間と出かける面白さだ。

建物に近づくにつれ、その不思議なデ

ザインと眩しいくらいの白壁に、少し心揺さぶられるものの、「ああ、なるほど」と展示品を予想させる手がかりは、まだ一向に現れない。唯一、天皇皇后御来館記念と刻まれた石碑の他に「鏝絵」という文字の入った看板を見つけ、「鏝」を指差し「これ、なんて読むの？」と周囲に聞けども、皆、首を横に振るばかり。

時代劇でよく見かける斜め格子の「なまこ壁」に挟まれた通路をくぐると、いよいよ入館。そして、そのエントランスの空間をぐるりと見渡した時、壁の説明書きの一つに、「左官」という文字を見つける。そこでようやく、あの漢字の読みの見当がつく。こて。それを使得って漆喰で描くから「鏝絵(こてえ)」。だから、建物は白亜の漆喰、そして入口へと続く通路はなまこ壁。全てがつながった。

そして、この町の左官職人であった入江長八なる人物が、鏝と漆喰で絵を描き、明治の初期に独特の芸術を完成させたことを、私たちは知ったのだった。

平面に盛られた漆喰で、半立体に造形された初めて見る緻密な技法に驚きながら、職人と芸術家の境界とは一体何なの

くのが子どもの営みというものののだ。

先日、こんな園内の記録を見かけた。毎年、近隣のスーパが主催する児童画コンクールなるものへのお誘いを受ける。希望者にはその用紙を配って、いつ

とき、描画に勤しむのであるが、いつもと違うのは、絵のタイトルを書き込む欄があること。それを子どもたちに伝えると、「ええ」と悩ましげな声が上がった。

そこで、それぞれが描いた作品を挟んで、「これは何?」と問いかけていくと、「これはね、キャンディーだよ。それでこれがハートに手と足が生えたハート人間!歩いていた空からキャンディーが降ってきたの!」と、実はそこに、それぞれの物語が潜んでいたことを知るうちに、それにたった一言のタイトルをつけることが、さらに難しくなってしまう。

本来なら言葉に表せないから「描く」わけなのだけれど、逆に、そこに添える言葉と一緒に考える会話を通して、抽象的な模様や色彩にさえ、その意味や魅力を再発見していく保育者なのだった。(5歳 8月31日「題名って難しい」)

作品作りをするのではなく、ただただ、五感を通して、思考の中を漂うことを通

してその作業プロセス全体を味わうのが子どもの造形。だからそれが、営みとしての奥行きと豊かさを持つのだ。そこにタイトルをつけるなんて、大人とは本当に野暮で厄介な存在だ。

実は、都内の保育関係の会合で、東京左官会館という貸し会議室を利用することがある。初めてそこを訪れた時、自社ビルまで持つ左官業組合の地力に驚いたのを覚えている。当時はまだ、美術界にまで、その影響が及んでいることなど知る由もなかったが。

この左官業組合の援護のもと、全国の左官職人が集まり、技の粋を結集したのが、あの美術館の建築なのだという。

園長 折井誠司

●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●編集人 折井 誠司
●発行人 折井 誠司
●印刷所 幼保連携型認定こども園せいび
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会

〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-12
電話 042-675-1155
ファックス 042-677-5643
Email: seibi@kodomo-kyo.jp
http://kodomo-kyo.jp